

北陸横穴墓研究の視点

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池上, 悟 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/7176

北陸横穴墓研究の視点

池上 悟 (立正大学)

古墳時代後期に日本列島の各地に造営された横穴墓は、群集性を最大の特徴としている。後期に盛行する群集する古墳群は、古墳文化の及んだ全域を対象とすれば小規模円墳を主体とする高塚群集墳を特色として認識できるものの、地域によっては横穴墓が主体となっている。北陸地方もまた、肥後・豊前・豊後・出雲・西遠江・相模・南武蔵・房総・東南北部地域と同じく群集墳としては横穴墓が主体を占めている。

北陸地域の横穴墓については直接見聞するところは少なく、僅かに富山県高岡市所在の江道横穴墓群の調査時に見学した程度であった。平成17年に合併前の福岡町で開催された、ふくおか歴史フォーラム「ふくおかの飛鳥時代を考える」に参加する機会を得て、越中地域の横穴墓について若干検討した(「越中地域における横穴墓の様相」)。ここでは、この検討をもとに、北陸地域所在横穴墓の研究課題に触れてみたい。

後期に群集する小古墳の出現の要因は、基本的には古墳造営社会の基盤の変質、従前古墳を築造することのなかった階層の台頭によるところであり、これら新階層を古墳造営集団として組織して古墳秩序に取り込んだ地域社会の動向を反映するところである。従って、研究の基本は、所在横穴墓の早急な資料化が望まれるところではあるものの、現状では加賀・能登地域における資料集成が未完であり、大きな研究の阻害となっている点は否めない。開発に伴う事前調査がようやく下火となってきた現在、学術的な調査を進展せしめるところが文化財行政の望まれるところと認識されるものの、厳しいところではあろう。

現状における横穴墓の主要な研究は、次の視点で行われている。北陸地域の横穴墓を対象としても有効な視点と認識される。

横穴墓が直接的には埋葬施設として構築されている点を勘案すれば、①・埋葬様式の検討が必要である。横穴墓は同時期に構築された横穴式石室に比較して、岩盤を掘削して容易に構造を造作できる点において特徴的であり、地区に従った②横穴墓構造の違いを確認できる。群集する後期小規模古墳群は、これが群集墳・横穴墓のみで特定地区に展開することはない。地区の古墳築造秩序に基づいて現出したところとであり、在地③首長墓との

関連が問題となる。

①の視点は、実際に調査によって埋葬された人骨が確認されなければ検討は困難である。以前より注目されるころでは、越中地域の西部地区にのみ限定されて展開する横穴墓のうち、近年の調査にかかるころでは、群中の特定横穴墓から極めて多くの人骨が集積されて確認される点である。頭川城ヶ平横穴墓群、江道横穴墓群などが顕著なところであり、特に江道横穴墓群に確認された人骨の集中する特定横穴墓に隣接して人骨の出土しない横穴墓が併存する様相は、第一次埋葬用の横穴墓と、人骨を集積する改葬用の横穴墓という異なった横穴墓の使用法が想定される。

通常規模の横穴墓を改葬用として使用する埋葬様式は、隣接地域では出雲地域で確認されるころであり(「山陰横穴墓の埋葬様式」平成一〇年)、須恵器大甕を破碎した破片を敷き詰めた特徴的な須恵器床の存在と関連するころと看取される。北陸横穴墓の系譜想定的有力要因となり得るところと思われる。

②の地区による横穴墓構造の差異、すなわち横穴墓型式は地域色とともに現出の系譜を表している。北陸地域にあっては、加賀・法皇山横穴墓群に顕著な複室横穴墓が、漠然と九州地域に淵源を辿れると多くの研究者が指摘して来ているものの、個別具体的に論及されたことはない。九州地域における複室横穴墓は、複室構造の横穴式石室を規範として現出したものと容易に想定できるものの、この点も未だ確定した事実とは認められない。

加賀・法皇山横穴墓群に群在する以外の東国に確認できる複室横穴墓の存在は僅少に過ぎない。福島県いわき市所在の中田横穴墓は、内部壁面に塗彩による装飾を施しており、この点においても九州系である点は明白である。宮城県古川市所在の朽木橋横穴墓群中の、群形成の端緒を担った横穴墓の構造も複室の形骸化したものと捉えることができる(「東国横穴墓の型式と交流」平成6年)が、墓道を交差させることによって群中の単位群を明確にする様相は北部九州、特に豊前地域に特徴的な様相であり系譜を窺うことが可能である。

越中地域に確認できる特徴的な横穴墓型式は、横穴墓では玄室に対して羨道が中央に付設するのが一般的であるのに対して、一方に偏って付く玄室横長平面の構造である。従前この型式の横穴墓が確認されていたのは山陰・出雲地域であり(「山陰横穴墓の受容と展開」)、地域の首長墓である高塚古墳主体部に採用された特徴的な石棺

式石室を規範として現出した型式と考えられるところである。従って、越中地域へは改葬様式を伴って伝わったものと想定した。

類似した横穴墓型式は、加賀・寺山横穴墓群にも確認される場所であり、想定される横穴墓群に伴う墳丘の存在も出雲への系譜想定を強くするところである（「東国における出雲系横穴墓」『考古学論研』第11号、平成18年）。

この出雲に特徴的な横長玄室平面・偏った羨道構造の横穴墓は、畿内地域最大の横穴墓群である柏原市・高井田横穴墓群中にも多数確認できる。花田勝広により、九州北部・豊前地域に系譜を有し河内に定着して奥壁に造付石棺を付設して型式化した点が明確にされてきたところであるが、この種横穴墓型式については言及するところはない。

高井田横穴墓群は、横穴墓に数に比較して、個別横穴墓の時期を確定するに足る出土遺物は僅少であり、この点が群形成および群内の横穴墓編年を困難としている。構造に多様性を現出する横穴墓は、主要各部の長さをもとにした企画的な検討も可能であるが、畿内地域においては十分な検討は果たされてはいない。今後の検討課題である。

能登地域における多様な横穴墓型式については、既に昭和51年の『珠洲市史』刊行時点において出雲あるいは

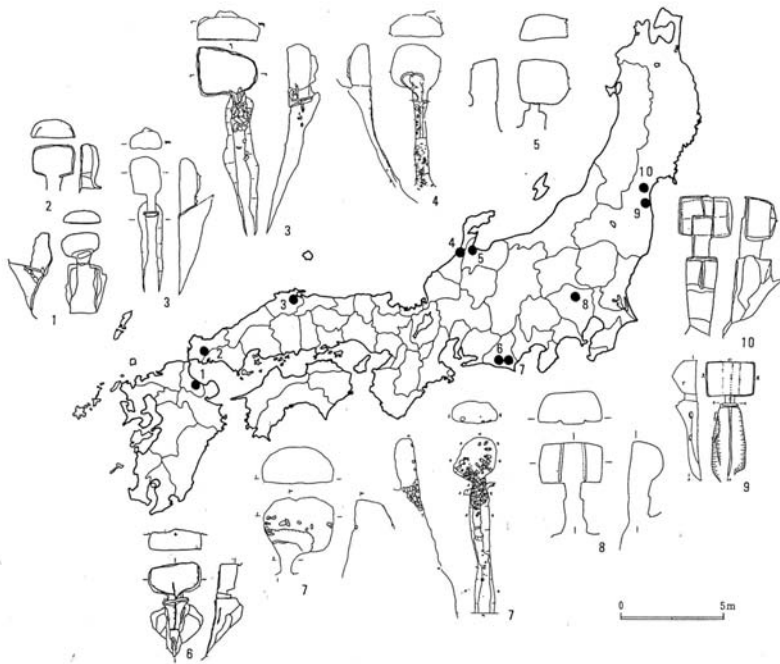
九州からの系統を示唆されている。その後検討に値する新資料がなく、検討はすすんでいない。

地域を異にした横穴墓型式の確認は、直接的には懸隔した地域間の墳墓の系譜関係を明示するところであり、間接的には地域間の集団の移動を物語るところと認識できる。横穴墓のみではなく関連する資料を総合的に検討すべき今後の重要課題と認識される。

③の横穴墓を地域古墳文化の総体に位置づけ、在地首長墓との関連を検討する方向は、既に昭和49年の『志雄町史』段階で示されている。地区最大の横穴式石室墳の現出の背景を横穴墓の存在を勘案して検討されたところであり、今後継続すべき優れた視点である。

この視点は重要であるにもかかわらず、検討された事例は、畿内地域を含めても少ない。横穴墓被葬者手段の性格を把握するためには、必要不可欠な視点である。

古墳総数約15万基、このうち横穴墓は4～5万基、前方後円墳にいたっては約5000基に過ぎない。現状の古墳文化は僅か3%の前方後円墳で語られており、巨大古墳に限定すれば畿内に偏向した視点とも極言できる。古墳総数の9割は後期群集墳で占められており、横穴墓は群集墳の一翼を担う重要な存在である。横穴墓研究は豊かな古墳文化解明の基本として、各地で盛んに行われることを期待したい。



- 1～大分県・上ノ原横穴墓群 2～山口県・朝田横穴墓群 3～島根県・中竹矢横穴墓群
- 4～右川県・聖川寺山横穴墓群 5～富山県・江道横穴墓群 6～静岡県・向山横穴墓群
- 7～静岡県・大寄横穴墓群、大淵ヶ谷横穴墓群 8～埼玉県・吉見百穴横穴墓群
- 9～福島県・福迫横穴墓群 10～宮城県・宗禅寺横穴墓群

図1 出雲系横穴墓の分布